

筑後國府跡

—平成22年度発掘調査報告—



平成23年(2011)3月
久留米市教育委員会

筑後國府跡

—平成22年度発掘調査報告—

平成23年(2011)3月
久留米市教育委員会

序

久留米市は、筑後平野の中心部に位置し、耳納山地の緑と筑後川の水に象徴される豊かな自然に恵まれています。九州のクロスポイントとして交通の要衝にもあたり、発展を続けています。平成17年2月、近隣の田主丸町・北野町・三潴町・城島町と広域合併を行い、新たな久留米市として歩み始め、平成20年4月には中核市に移行しました。また、平成23年3月には九州新幹線が全線開通し、今後も福岡県南地域の中核都市として発展していくものと思われます。

このような恵まれた環境のもと、人々は多くの文化を創造しました。このことを示すように、市内各地には貴重な歴史遺産が数多く存在しています。特に、本書で報告します筑後国府跡は、古代における筑後地方の行政・経済・文化の中心として発展し、現在にいたる久留米市発展の礎となった貴重な遺跡です。

筑後国府跡は、1961年に九州大学考古学教室によって、全国に先駆けた国府政庁の発掘調査が行われて以来、本市が継続して調査を実施してまいりました。その成果は、全国の官衙研究に新たな情報を発信し続けており、全国的にも注目される重要な遺跡です。

今回の発掘調査とその成果を掲載した本報告書の発行によって、久留米の歴史解明、全国の官衙研究、さらに文化財愛護思想の理解や普及に多少なりとも貢献できれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査・本書の発行に際しまして、多大なご理解のもとにご協力を頂きました各地権者や地元の皆様、筑後国府跡発掘調査指導員の諸先生方をはじめ、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成23年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

- 1 本書は、久留米市教育委員会が国・県費の補助を受けて、平成21・22年度に実施した筑後国府跡の発掘調査報告である。
- 2 調査に係わる事務は、久留米市教育委員会の委嘱を受け、久留米市文化観光部文化財保護課が執行し、調査は文化財保護課の神保公久・小澤太郎・江頭俊介が担当した。
- 3 本書に掲載した遺構実測図の作成は、調査担当者の他、梶島ミドリ・橘原初美・藤木幸子・山田治代、遺物実測図作成と本書に掲載した図面類の作成は、担当者と非常勤職員の米澤美詠子が行った。
- 4 空中写真を除く遺構写真のカメラは、マミヤRB67、記録写真のフィルムは、白黒フィルム(T-MAX100)・カラーリバーサル(エクタクロームEPP)を6×7判で各担当者が撮影した。また、遺物写真も各担当者が撮影した。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
- 5 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系(日本測地系)を基に作成し、図面の方位は座標北を示す。
- 6 本書に使用した遺構の略記号は、SB―掘立柱建物、SD―溝、SI―竪穴建物、SK―土坑、SP・P―ピット・柱穴、ST―土壌墓を示す。
- 7 調査にあたり、筑後国府跡発掘調査指導員の各位にご指導・ご助言を頂いた。
渡辺正気(元九州考古学会会長)、小田富士雄(福岡大学名誉教授)、西谷 正(九州大学名誉教授)
長 洋一(元西南学院大学教授)、田中正日子(元日本経済大学教授)、坂上康俊(九州大学大学院教授)、小池史哲・齋部麻矢(福岡県教育庁)、小田和利・杉原敏之(九州歴史資料館)
この他、調査・報告に際して下記の方々には多くのご指導・ご協力を頂いた。(敬称略、五十音順)
赤川正秀(大刀洗町教育委員会)、一瀬 智・岡寺 良(九州歴史資料館)、小田裕樹(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)、西健一郎、橋口達也(福岡女子短期大学)
- 8 本書に収録した遺物及び調査に関わる記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵保管されており、活用される予定である。
- 9 遺構番号については、平成8年度以降は調査回数ごとに付しているが、それ以前の調査については従来の通し番号を使用する。また、隣接する調査地点などで過去の調査成果から同一の遺構と考えられるものについては、従来の遺構番号を使用し、平成8年度以降の新たに確認された遺構は調査回数に遺構番号を付す。
(例) 第238次調査SK5→238SK5
- 10 遺物観察表の凡例は下記のとおりである。
法量の単位はcmである。()内の数値は現存値、または復元値を示す。
色調は『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社 1997年版)による。
陶磁器の分類は、太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊XV―陶磁器分類編―』
太宰府市の文化財第49集による。
- 11 本書の文責は、本文目次と文末に記した。全体の編集は神保が担当した。

本文目次

筑後国府跡（略称TKH）

I. 調査の概要	（神保） 1
II. 位置と環境	3
III. 第238次調査（調査番号：200921）	（神保） 5
IV. 第240次調査（調査番号：201001）	（江頭） 8
V. 第242次調査（調査番号：201012）	（小澤） 14
報告書抄録	19

挿図目次

I. 調査の概要

第1図 筑後国府跡発掘調査地域図（1/5,000）	……折込
第2図 第232次調査風景（北西から）	1
第3図 第240次調査風景（西から）	1
第4図 第241次調査風景（西から）	2
第5図 第241次調査風景（北から）	2
第6図 第242次調査SB10付近（南東から）	2

II. 位置と環境

第7図 筑後国府跡の位置と周辺の遺跡分布図（1/25,000）	……3
第8図 筑後国府跡の広がる合川町（南上空から—平成18年）	……4

III. 第238次調査

第9図 第238次調査表土剥ぎ風景（北東から）	……5
第10図 第238次調査風景（北から）	……5
第11図 第238次調査区全景（北から）	……6
第12図 第238次調査遺構配置図（1/50）	……6
第13図 第238次調査区全景（南から）	……7
第14図 SK5 全景（東から）	……7
第15図 SK5 実測図（1/30）	……7

IV. 第240次調査

第16図 第240次調査遺構配置図（1/200）	……9
第17図 S I 1・S T 10実測図（1/40）	……9

第18図 S I 1床面検出状況（北西から）	……10
第19図 S D 20完掘状況（西から）	……10
第20図 S T 10遺物検出状況（南から）	……10
第21図 S I 1出土鉄線実測図（1/2）	……11
第22図 調査区全景（南東上空から）	……11
第23図 第240次調査周辺主要遺構配置図（1/600）	……11
第24図 第240次調査出土遺物実測図（1/4）	……12
第25図 第240次調査出土遺物（写真）	……13

V. 第242次調査

第26図 調査区北壁土層図（部分、1/30）	……14
第27図 第242次調査区平面図（1/150）	……15
第28図 S B 10実測図（1/80）	……16
第29図 出土遺物実測図（1/4）	……16
第30図 調査区全景写真（西上空から）	……17
第31図 調査区全景写真（東から）	……18
第32図 調査区北壁面土層写真（南から）	……18
第33図 調査区東側のピット群写真（南東から）	……18
第34図 出土遺物写真①	……18
第35図 出土遺物写真②	……18
第36図 出土遺物写真③	……18

表目次

第1表 第240次調査出土遺物観察表	……12
--------------------	------

表紙写真

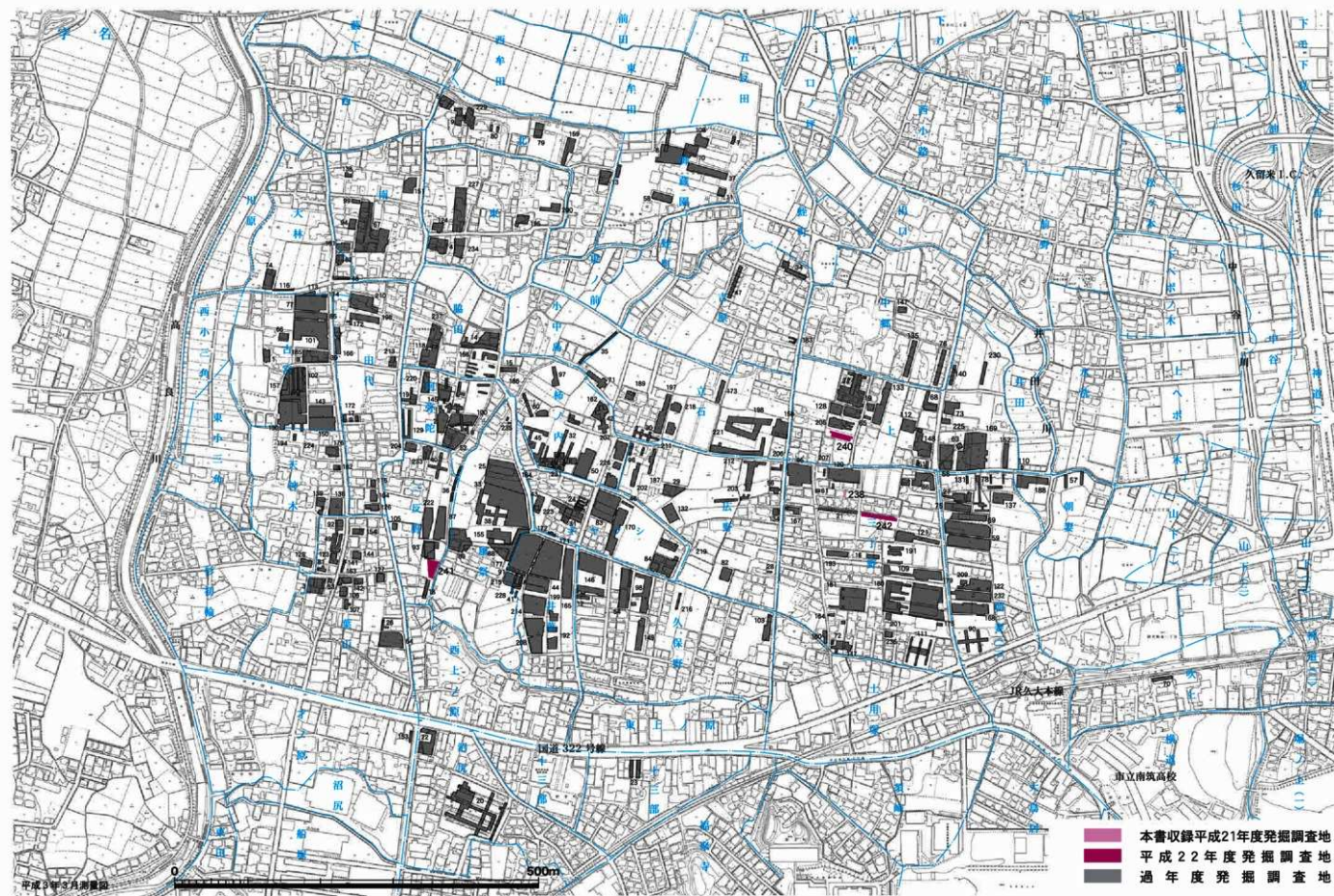
（表） 筑後国府跡第242次調査区全景（西上空から）

（裏） 左上…筑後国府跡第238次調査風景（北から）

左下…筑後国府跡第242次調査区全景（西上空から）

右上…筑後国府跡第240次調査区全景（南東上空から）

右下…筑後国府跡第240次調査 S T 10全景（北から）



第1図 筑後国府跡発掘調査地域図 (1/5,000)

I. 調査の概要

a. 調査の体制

平成22年度国庫補助事業の筑後国府跡の調査に係わる調査体制は下記のとおりである。

調査主体：久留米市教育委員会	教 育 長：堤 正則	
調査総括：文化観光部	部 長：辻 文孝	次 長：佐藤 光義
文化財保護課	課 長：立石 雅文	学芸主幹：山口 淳
課長補佐兼課主査：古賀 正美	宮崎 俊一	課 主 査：白木 守
	事務主査：近澤 康治	庶務担当：本庄ともえ
	調査担当：神保 公久	小澤 太郎 江頭 俊介
	整理担当：米澤美詠子	

発掘調査臨時職員（平成21・22年度分）

秋永絹子・大坪 進・大淵文子・枕島ミドリ・国武三歳・財木美智子・佐藤朱美・高尾春代
田中樹子・田中とし子・堤 淳子・西ヶ迫久美子・楢原初美・西田美恵子・半田純香・廣木 誠
藤井佳都子・藤木幸子・堀江俊文・丸山 幸・森山美千代・柳 鈴子・山田治代・由布幸子
良永洋子・吉村智子・渡辺しげ子・渡辺やつ子

発掘調査整理臨時職員（平成21・22年度分）

飯星和子・石橋和子・川尻朋子・田中悠美子・永瀧笑美子

b. 筑後国府跡の調査概要

平成22年度に実施した筑後国府跡の発掘調査は、補助事業2件（いずれも確認調査）、公共事業1件の合計3件について実施した。

以下、平成21年度に調査した中から、第232・238次調査と、本年度調査を実施した第240～242次の概要を述べる。

第232次調査は、10世紀中頃～11世紀後半頃に存続したと想定されている筑後国府Ⅲ期政庁の東側隣接地において実施した重要遺跡確認調査である。調査地周辺の調査において、11世紀後半の礎水遺構が検出されており、Ⅲ期～Ⅳ期政庁に伴う国司館の存在が想定されている。

調査では、礎水遺構と礎水遺構に沿う幅約1.5m程度の園路と思われる道路遺構、掘立柱建物などを検出している（未報告）。



第2図 第232次調査風景（北西から）



第3図 第240次調査風景（西から）

第238次調査は、筑後国府跡Ⅲ期政庁の北西約100m付近で実施した専用住宅建設に先立つ確認調査である。調査の目的は、国府城を東西に通過する官道南側の遺構状況を把握することであったが、土坑1基、ビット数基を確認したのみである（第Ⅲ章参照）。

第240次調査は、共同住宅建設に先立つ確認調査で、筑後国府跡Ⅲ期政庁の北西約200m付近で実施した。調査区周辺の上地区では、8世紀後半～11世紀中頃にかけての大型掘立柱建物などの遺構群が検出されている。今回の調査地は上地区の南西部分に位置し、遺構の広がりを確認するために実施した。調査では、竪穴建物1棟、土壇墓1基を検出し、遺構の変遷や存続時期など、過去の調査と同様の成果を得られている（第Ⅳ章参照）。

第241次調査は、都市計画道路3・4・18号合川町津福本町線整備に先立つ調査である。調査地は筑後国府跡Ⅱ期政庁の南方約200mにあたり、周辺における調査では大型掘立柱建物群や整地層、銅鍛冶炉を伴った竪穴建物など多くの遺構が検出されている。調査の結果、調査区ほぼ全域に整地層が確認され、整地層に混入して鉄滓、羽口、砥石、被熱した花崗岩などの礫などが多く出土し、調査区周辺に国府内で消費する金属製品を製造した鍛冶工房が存在したものと思われる。また、整地に伴って、掘立柱建物群も検出されている。（未報告）

第242次調査は、宅地造成に伴う事前の調査である。道路敷設部分について調査を行った。調査地は筑後国府跡Ⅲ期政庁の北西付近にあたり、関連遺構の存在が想定された。

調査では、掘立柱建物1棟、ビットなどが検出されたのみで、遺構密度は低く、主要な遺構は検出されなかった（第Ⅴ章参照）。



第4図 第241次調査風景（西から）



第5図 第241次調査風景（北から）

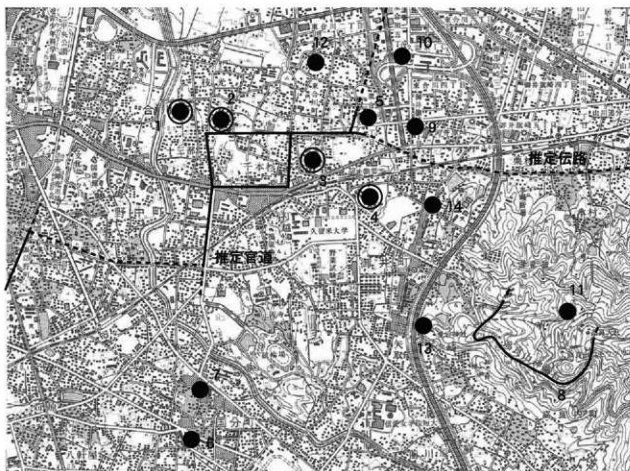


第6図 第242次調査SB10付近（南東から）

II. 位置と環境

筑後国府跡の立地と自然環境

筑後国府跡は、久留米市街地の東方約1.6km付近の東西1.0km・南北0.7km程度の範囲に展開し、筑後平野南端に連なる耳納連山西端に聳える高良山（312m）から北西に派生する低位段丘上に立地する。久留米市は九州最大の穀倉地帯である筑後平野の中央部分に発達し、九州における交通の要衝に位置する。筑後平野には阿蘇外輪山に源を発した筑後川が流れ、周辺流域を潤しながら有明海に注ぐ。筑後国府跡から筑後川までの距離は現在0.6 km程度であるが、国府の選地には水運と地理的立地の良さが考慮されたものと思われる。遺跡の展開する台地の南端には水縄断層帯が東西に伸び、断層崖下には湧水がいくつも見られる。これらの湧水は小河川となり、遺跡の立地する台地を3分割している。この枝光台地の西側には高良川が、東側には井田川が流れ、北方の筑後川氾濫原、南方の断層崖と共に国府域の四至を画す。



第7図 筑後国府跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

1. 筑後国府Ⅰ期政庁 2. 筑後国府Ⅱ期政庁 3. 筑後国府Ⅲ期政庁 4. 筑後国府Ⅳ期政庁
 5. ヘボノ木遺跡 6. 筑後国分僧寺跡 7. 筑後国分尼寺跡 8. 高良山神籠石 9. 神道遺跡
 10. 下見遺跡 11. 高隆寺跡 12. 西小路遺跡 13. 祇園山古墳 14. 二本木遺跡

筑後国府の概要

東アジアの社会情勢が不安定だった7世紀後半、枝光台地西端の田代・古宮地区を中心に大溝や土塁・河川等によって囲まれた台地上に前身（先行）官衙と呼称される官衙的な遺構群が出現する。その後、筑後国が成立した7世紀末から8世紀中頃にかけては、古宮地区に南北約180mの築地塀で区画された政庁的な官衙が営まれる（Ⅰ期政庁）。そして、九州において律令体制が安定した時期をむかえた8世紀中頃、古宮地区から東へ約200mの阿弥陀地区に築地塀で区画され、9世紀前半には礎石建物が築造される南北75m、東西67.5mの政庁が営まれる（Ⅱ期政庁）。Ⅱ期政庁では、西脇殿や政庁前面の朝集殿的な建物群、築地塀、大量の古瓦などが検出されている。この時期、政庁付属官衙群は枝光台地一帯に広がり、各官衙はブロック毎に計画方位をもって造営されている。また、Ⅱ期政庁と浅い谷を挟んだ南東約200m付近では、推定国司館跡も確認されている。Ⅱ期政庁は10世紀前半に火災により焼失したと推定され、政庁は再び移転する。Ⅲ期政庁は、Ⅱ期政庁から東へ約600mの朝妻地区に築造されており、幅約4mの大溝で区画された南北141m・東西137mの大区画の内部からは、正殿・東西脇殿など大型掘立柱建物が検出されている。付属する官衙群はⅢ期政庁の東側で確認されており、国司館と推定される施設も存在する。さらに11世紀末には南東約400mへ再び移転し（Ⅳ期政庁）、『高良記』に見える「今ノ符」と思われるこの政庁は、12世紀後半頃まで存続していたようである。『筑後国検交替使実録帳』には、大治5（1130）年～仁治2（1241）年までの国府院や駅館の荒廃した様子が描かれ、南北朝争乱期には懐良親王が筑後国衙に陣を置いた記事がある。実質的な機能は別として、筑後国衙の名称は15世紀まで存続していたものと推測される。13世紀以降の国衙関連遺構は発見されていないが、今後の調査で明らかになっていくものと思われる。

（神保）



第8図 筑後国府跡が広がる合川町（南上空から－平成18年）

Ⅲ. 第238次調査

1. 調査に至る経過

本調査は、久留米市朝妻町1442-12、-13、-15において実施した、専用住宅建設に先立つ確認調査である。平成21年11月30日、地権者より「埋蔵文化財包蔵の有無について」の照会が提出された。当該地は、筑後国府Ⅲ期政庁の北西約100mにあたり、北側隣接地で第120次調査、北西側で第207次調査、南西側では第60次調査が行われている。特に北側の第120・207次調査では、筑後国府域に東西に敷設されている官道の南側溝が検出されており、第120次調査においてはその南側で掘立柱建物が5棟検出されている。このような周辺における調査成果から、対象地にも遺構の存在が想定された。専用住宅の基礎がベタ基礎工法であり、遺構面までは約1mと深いことから遺構の保存は可能と考えられたが、遺構の広がりや残存状況を把握する目的で、確認調査を実施したい旨を地権者に伝えた。その後の協議により、専用住宅建設予定地に影響のない箇所にトレンチを設定することによって、確認調査を実施する運びとなった。調査は平成22年1月20日に行った。

2. 調査の方法と経過

対象地は、南北長約13m、東西長約32mと東西に長く、専用住宅は敷地の西部部分に建設が予定されていた。過去の調査により、周辺は元来、畑地であり、調査地には盛土が施されていることが判明していた。平成22年1月20日の午前、重機により掘削を開始した。2時間程度で約13㎡の表土を剥ぎ、その後、作業員を導入して遺構検出を行った。略図を作成した後、

遺構の掘削を開始し、並行して遺構実測を行った。全ての遺構を掘り終わった後、全体写真撮影を行い、重機により埋め戻しを行うことによって、全ての工程を終了した。遺構配置図の作成はトータルステーションを用いて行い、その記録は株式会社CUBIC製ソフト「遺構くんCubic」で編集・保管している。記録写真はカラーリバーサル・モノクロームともに6×7判で撮影した。



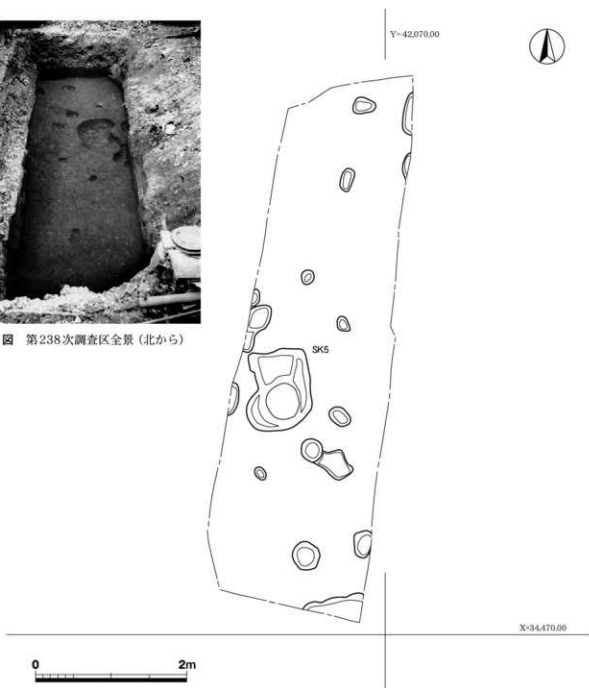
第9図 第238次調査表土剥ぎ風景（北東から）



第10図 第238次調査風景（北から）



第11図 第238次調査区全景（北から）



第12図 第238次調査遺構配置図（1/50）

3. 検出遺構と出土遺物

対象地は、周辺における過去の調査成果から想定されていたように、元来は畑地で、宅地にする際に盛土が施されている。宅地造成時に約0.8mの盛土がなされており、その直下に約0.3mの遺物包含層（黒色砂質土）が堆積している。遺構検出面である地山面は黒褐色土で、若干硬質である。面積が狭いこともあり、検出遺構は少なく、土坑1基、ピット14基などを検出した。しかし、調査の目的であった官道南側での主要遺構やⅢ期政庁に関する主要遺構は検出していない。また、ピットに伴って少量の遺物が出土しているが、図化できるものは皆無であった。

検出遺構

土坑

SK 5 (第14・15図)

調査区の中央部分やや南寄りで見出した不整形の土坑である。埋土はしまりのない黒灰褐色砂質土で、上位から底面付近まで単一であった。平面形は、長軸長約1.1m、短軸長は最大で約0.9mを測る。遺構の中央南部分が一段深く、深さは最深部で約0.3mを測る。埋土からの出土遺物は皆無である。

ビット

今回の調査では、合計14基のビットが検出されている。

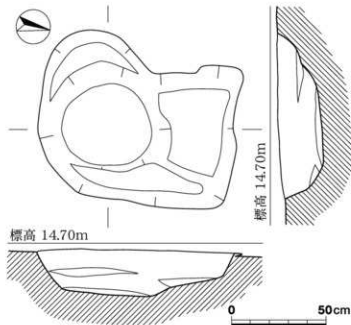
その他には南東部分で土坑状の落ち込みが確認されているが、全容は不明である。いずれも柱穴などの主要遺構には復元できず、樹木や耕作物等の樹根である可能性も考えられる。



第13図 第238次調査区全景(南から)



第14図 SK 5 全景(東から)



第15図 SK 5 実測図 (1/30)

4. 小結

第238次調査は、専用住宅建設に先立つ確認調査である。前述したように、周辺で実施された調査では、本調査区の北側約20m付近において、筑後国府城を東西に敷設された官道の南側溝が検出されている。この官道は、筑後国府跡の東側に隣接するへボノ木遺跡から西方へ、約1kmにわたって直線的に敷設されていることが確認されており、筑後国府内の曹司をはじめとする諸施設が配置される際の計画道路と認識されていた可能性が高い。また、南東約100mには筑後国府Ⅲ期政庁が位置しており、今回は官道と筑後国府Ⅲ期政庁間の遺構状況を確認することに主眼を置いた調査を行った。しかしながら、本文中にも述べたように、面積が13.2㎡と狭い調査であったこともあり、主要遺構は検出することができなかった。当該地区の遺構状況の把握については、今後の調査に委ねる形となった。(神保)

IV. 第 240 次調査

1. 調査に至る経過

第240次調査は、久留米市東合川町字上において実施した、共同住宅建築に先立つ事前の確認調査である。平成22年2月22日、地権者から、「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地周辺は、周知の遺跡である筑後国府跡（『福岡県遺跡等分布地図』030112番）に含まれ、北側隣接地では、昭和53年度に第19次、昭和60年度に第65次調査、平成7年度に第128次調査、平成17年度に第205次調査が行われており、8世紀から11世紀に及ぶ遺構群が検出されている。建設が予定されている建物は、杭打ちを伴うため、遺構の保存が不可能であり、発掘調査が必要である旨を回答した。その後の協議の結果、「久留米市埋蔵文化財調査指針」の「民間等開発における埋蔵文化財発掘調査に係る補助金等適用に関する運用基準」に基づき、零細対応による国庫補助対象の確認調査とすることで合意した。4月1日に地権者から「発掘調査の依頼」が提出され、文化財保護法による手続きを済ませた後、4月13日より発掘調査に着手した。調査期間は平成22年4月13日～平成22年4月30日である。

2. 調査の方法と経過

当該調査地の北側隣接地の調査では、8世紀後半の竪穴建物や掘立柱建物、10世紀中頃の土壇墓、11世紀前半～中頃の四面庇建物等が検出されている。今回の調査では、これらの建物群の広がりを確認することを目的とした。調査地は、南北約10m、東西約40mの長方形を呈する。その内、建物建設予定の南北7m、東西25m程度の範囲について、発掘調査を行った。平成22年4月13日に表土剥ぎを開始し、4月14日より遺構の検出作業を行った。4月19日には高所作業車による全景写真撮影を行い、4月24日、補足調査として、建物建設予定地西側の確認調査を行った。4月30日に埋め戻しを行い、調査を終えた。遺構配置図の作成はトータルステーションを用いて行い、その記録は株式会社CUBIC製ソフト「遺構くんCubic」で編集・保管している。記録写真はカラーリバーサル・モノクロームともに6×7判で撮影した。調査面積は105㎡である。

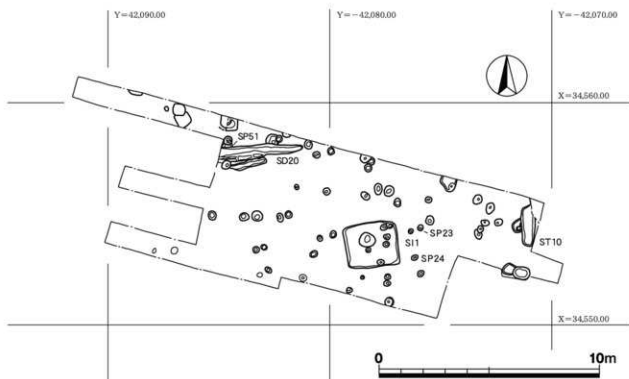
3. 検出遺構と出土遺物

本調査地は、高良山から筑後川に向かって北へ緩やかに傾斜する河岸段丘の低位段丘上にあり、南東から北西にかけてわずかに傾斜している。元来畑地であり、40cmほどの耕作土の下に、包含層である暗褐色土が10～20cm程度堆積しており、その下に遺構検出面である地山がある。地山はにぶい黄褐色土である。検出面の標高は約12mである。検出遺構は、8世紀後半～11世紀初頭の所産で、主要遺構は竪穴建物1棟、溝1条、土壇墓1基である。

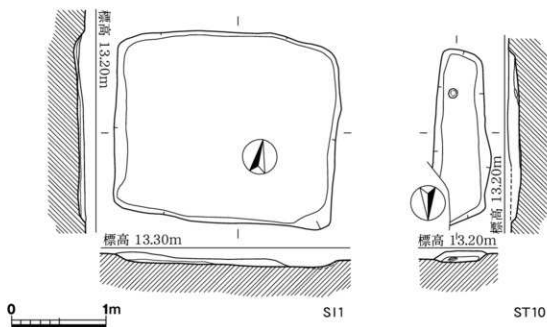
竪穴建物

S11（第17・18図）

調査区中央で検出した。一辺約2.2mの正方形の竪穴建物である。軸はN-7°-Wである。残存する遺構の深さは10cmであり、カマドはない。床面は周縁部以外が硬化している。床を取り除いた下に



第16図 第240次調査遺構配置図 (1/200)



第17図 SI1・ST10実測図 (1/40)

は、ピットがあるが、これは堅穴建物より先行するものであり、建物の柱穴はない。床下の中央に直径70cmの土坑があり、建物の湿抜きかと思われる。床面直上から5cm上にかけて土師器の坏や甕、須恵器蓋、3つに折られた鉄鎌などが出土している。鉄鎌の出土は、建物の廃棄行為に伴う祭祀によるものと考えられる。

溝

SD 20 (第19図)

調査区北西隅で検出した。幅50cm、深さ50cm。断面は丸みを帯びた逆台形を呈する。検出した長さは約2.5mである。軸はN-86°-Wで、南西から北東へ直線的に伸びて、先は調査区内で先細り、途切れている。埋土は黒褐色土で単層である。8世紀後半の土師器の坏が出土している。

土壌墓

ST 10 (第17・20図)

調査区東側で検出した。長さ1.8m、幅0.6m、深さ10cm、軸N-2°-Wの土壌墓である。北東の角を攪乱によって削平されている。南側底面から副葬品と考えられる土師器の小皿が1枚出土している。人骨の遺存はない。埋土は黒褐色土で、埋土中から土師器の小壺、埴等が出土している。10世紀後半から11世紀初頭の所産と考えられる。

トレンチ調査 (第16図)

建物部分以外の部分について、遺構の有無を確認するために、本調査区西側にトレンチを3本設けて上面確認のみの調査を行った。

北トレンチでは、方形の柱穴らしきピットが4基確認されたが、並びは不明である。調査区の北、もしくは北西に何らかの建物があり、その柱穴となる可能性がある。

出土遺物

土師器、須恵器、鉄鎌などが出土した。遺物の総量はバンコンテナー1箱と、極めて少なかった。詳細については、第1表を参照されたい。



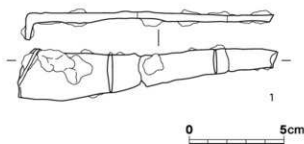
第18図 SD 11 床面検出状況 (北西から)



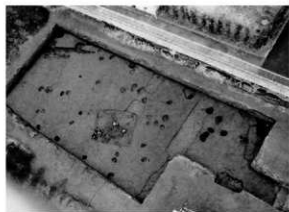
第19図 SD 20 完掘状況 (西から)



第20図 ST 10 遺物検出状況 (南から)



第21図 S11出土鉄鎌実測図(1/2)



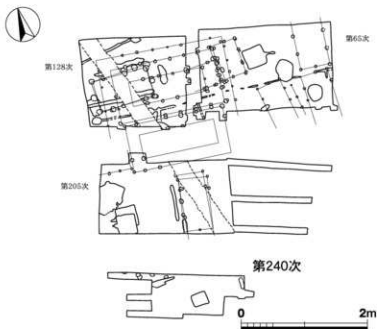
第22図 調査区全景(南東上空から)

4. 小結

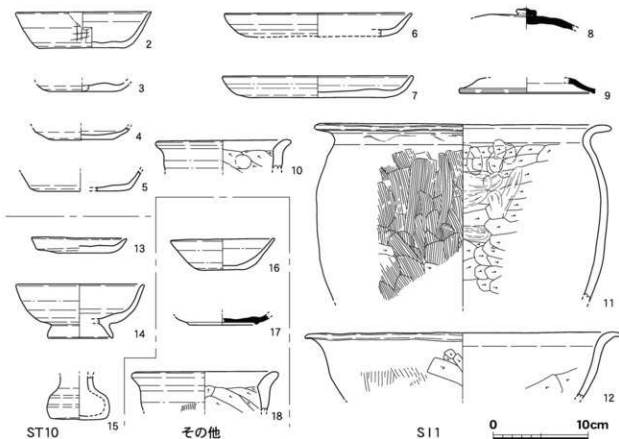
過去における調査の結果から、当該地一帯は、8世紀後半から9世紀にかけて、竪穴建物・掘立柱建物群などで構成される、官人層の居住地、もしくは何らかの公的施設群であったと考えられている。その後、10世紀中頃には、閑散地となり、土壇墓が数基設けられる。さらに11世紀前半から中頃になると、四面底を持つ掘立柱建物や、桁行に底を持つ東西に長い建物、区画溝、柵列などが設けられ、Ⅲ期政庁に付随する官衙または館であったことが明らかとなっている。

今回の調査では、8世紀後半の竪穴建物1棟、溝1条、ピット等が検出されたことから、8世紀後半～9世紀段階においては、隣接地の調査成果を踏襲する結果となった。また、10世紀後半から11世紀初頭の土壇墓が1基検出されており、この時期においても同様のことが窺える。さらに、11世紀前半以降の遺構は検出されておらず、当該地が、官衙施設の中央にあると想定される、広場としての空間である可能性が高まった。

(江頭)



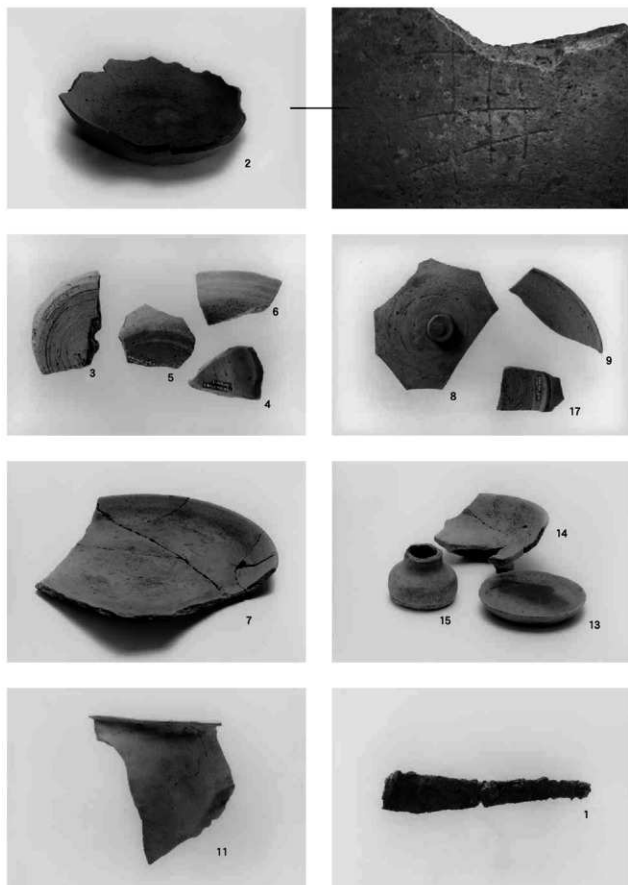
第23図 第240次調査周辺主要遺構配置図(1/600)



第24図 第240次調査出土遺物実測図 (1/4)

第1表 第240次調査出土遺物観察表

遺物No.	出土遺物	種別	器形	法量 (cm)			色調		調整		胎土	備考	遺物登録番号
				口徑(高)	底径(幅)	器高(厚)	外面	内面	外面	内面			
1 第22回	S11	鉄製品	鏃	(13.7)	2.1	0.3			回転ナデ	回転ナデ	細砂粒 (黒石)		201001-8
2 第24回	S11	土師器	杯	(14.4)	9.0	3.8	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒 (赤色粒子、黒色粒子、黒石)	へう記号	201001-1
3 第24回	S11	土師器	杯	(9.8)	(6.8)	(1.0)	黄褐色	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒 (赤色粒子、黒色粒子、黒石、白雲母)	全体に赤み	201001-2
4 第24回	S11	土師器	杯	(10.2)	(6.1)	(1.3)	にぶい黄褐色	黄褐色	ナデ	ナデ	微砂粒 (赤色粒子、黒色粒子、黒石、白雲母)	焼成不良 (内部黒化)	201001-3
5 第24回	S11	土師器	杯	(12.7)	8.8	(2.0)	明赤褐色	明赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	精良 (赤色、黒色、白色粒子)	表面に赤色化龍土	201001-19
6 第24回	S11	土師器	皿	(20.0)	(14.0)	2.5	黄褐色	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	精良 (赤色、黒色、白色粒子、白雲母)	内面焼成良好、底部外面黒化	201001-4
7 第24回	S11	土師器	皿	17.3	14.6	2.3	浅黄褐色	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	精良 (赤色、白色粒子)	内面焼成良好、底部外面黒化	201001-20
8 第24回	S11	須恵器	蓋	(12.4)	(2.3)		灰黄	灰黄	回転ナデ	ナデ	精良 (黒色、白色粒子)		201001-15
9 第24回	S11	須恵器	蓋	(14.4)		(1.6)	灰黄	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	精良 (白色粒子)		201001-16
10 第24回	S11	土師器	甕	(14.4)		(3.2)	黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	微砂粒 (黒石)	外面吹きこぼれ痕、内面赤褐色	201001-18
11 第24回	S11	土師器	甕	(31.4)		(18.8)	浅黄褐色	黄褐色	ナデ	刷毛目	微砂粒 (黒石)	外面門歯痕、黒底、置き火痕	201001-13
12 第24回	S11	土師器	鉢	(33.4)		(7.0)	黄褐色	黄褐色	ナデ	タタキ	微砂粒 (黒石)	外面コゲ付着	201001-21
13 第24回	ST10	土師器	小皿	10.1	6.2	1.7	黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	微砂粒 (赤色粒子、白雲母)	底部へう切り	201001-23
14 第24回	ST10	土師器	碗	(13.6)	5.8	5.7	黄褐色	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒 (黒石、赤色粒子、白雲母)	内面門歯痕	201001-25
15 第24回	ST10	土師器	小皿	(3.4)	6.1	4.7	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒 (角閃石、白雲母、白色、黒色粒子)	底部へう切り	201001-24
16 第24回	S P23	土師器	杯	(11.0)	(5.6)	3.2	浅黄褐色	浅黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒 (赤色粒子、白雲母)		201001-26
17 第24回	S P24	須恵器	碗	(10)	7.2	(1.1)	灰白	黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	精良 (黒色、白色粒子)	削り出し高台	201001-27
18 第24回	S P51	土師器	甕	(15.6)		(4.1)	黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	刷毛目	微砂粒 (赤色、白色粒子)		201001-28



第25図 第240次調査出土遺物 (写真)

V. 第 242 次調査

1. 調査に至る経過

この調査の発端は、平成22年8月18日付で、土地所有者より久留米市朝妻町字三丁野1438番1における、宅地造成に先立つ埋蔵文化財の有無についての照会がなされたことによる。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である筑後国府跡に含まれ、かつⅢ期国庁北門の北西側約30mに位置する。このような状況を踏まえ、同月27日、現地で試掘調査を実施したところ、現地地表下85cmで地山面を確認しピットを検出した。このため、事前に発掘調査が必要であると土地所有者側へ回答した。その後の協議で、分譲予定地内の進入路部分を確認調査することで合意した。

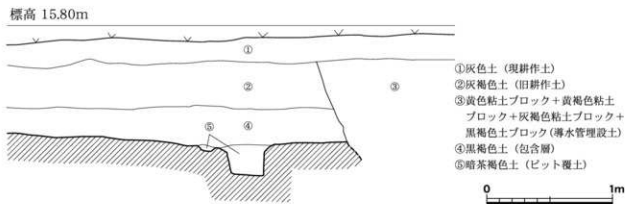
現地調査は平成22年10月15日より開始し、同年10月28日に終了した。なお、対象面積は924㎡で、そのうち調査面積は137㎡である。

2. 調査の方法と経過

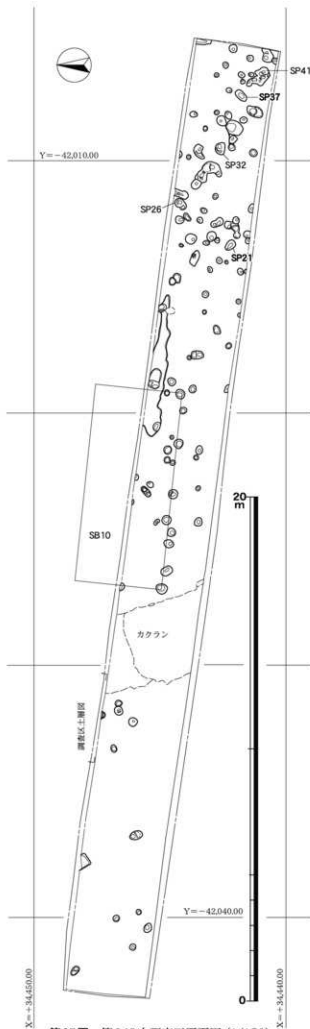
対象地は、東西長約53m、南北長約17mの細長い形状で、その敷地北辺に沿って幅4.5m、長さ40mの進入道路が設置される計画である。この部分に長さ約38m、幅約3.5mのトレンチを設定した。

現地調査の経過を抄録すると次のようになる。平成22年10月15日、対象地の草刈りを実施、掘削土と混じらないよう敷地南側に集める。18日、東側から重機で表土掘削を開始する。表土・旧表土・包含層の順で、深さ80～90cm程で地山面に達する。19日、作業員を投入し壁切り・土養生後、遺構検出作業を実施する。20日、平板図作成（1/50）後、遺構掘削作業実施。21日、調査区内と周辺の清掃作業を行い、気球写真撮影、個別写真撮影を実施する。また、座標移動、トータルステーションによる測量作業を開始する。22日、測量作業終了。土層図作成（1/10）。25・26日、雨のため現場作業中止。27日、排水作業、ピット埋め戻し作業を行う。28日、重機により埋め戻し作業を実施。防護ネット等を撤収し、現地調査を終了する。

調査記録について述べる。全体もしくは遺構個別写真撮影には、カラーリバーサル6×7判、モノクローム6×7判のフィルムを使用した。遺跡全体の図面記録は、トータルステーションにより三次元計測してデータを取得し、パソコン上で専用の編集ソフトを用いて図化している。



第26図 調査区北壁土層図（部分、1/30）



第27図 第242次調査区平面図 (1/150)

3. 検出遺構と出土遺物

調査区北壁中央付近の層序は、上から灰色土（現耕作土：15～20cm）、灰褐色土（旧耕作土：36～40cm）、黒褐色土（包含層：20～32cm）で、暗茶褐色の地山層に至る（第26図）。地山面は北側にやや標高を下げている。調査区中央西寄りに、幅約3mの導水管掘形が斜行している。

全体的に遺構密度は低い。導水管掘形から西側には散発的にビットが見られるのみであるが、東側は比較的多くビットが分布しており、柱痕が確認できるものもある。全体で60基以上のビットが確認され、深さ30cm以上あるものも多かったが、覆土は柔らかく掘り下げは比較的容易であった。

なお、検出遺構は少なく、掘立柱建物1棟とビットのみである。

検出遺構

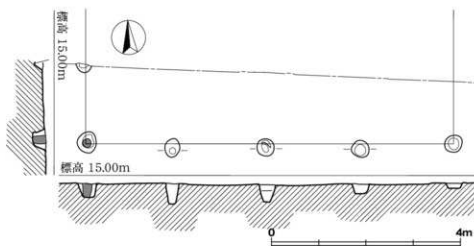
掘立柱建物

SB 10（第28図）

調査区中央部に検出した東西棟建物である。計画方位は、N-6°-Eである。北側柱列は調査区外へ延びるために未検出である。柱間は桁行4間、梁間1間以上と考えられる。桁行は西から1.9m+2.0m+2.0m+2.0mで、その総長は7.9mを測る。柱穴掘形は円形プランで、直径約30～40cm、深さ約10～45cm。南西隅柱で直径18cmの柱痕を確認している。出土遺物に土師器・須恵器の供膳具片と甕、焼土塊がある。

ビット（第27図）

調査区の東側で比較的集中した状況で確認された。狭い調査区ではあるが、座標北から60°程振れた形で帯状にまとまって延びているようにも見える。個々のビットは直径30～50cmのものも多く、重複もしくは切り合うものもある。

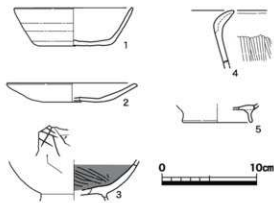


第28図 SB 10実測図 (1/80)

出土遺物

出土遺物は小片ばかり計162点で出土量は極めて少ない。その構成は、土師器の供膳具が116点、須恵器の供膳具が2点であり、合計118点、実に72.8%が供膳具となる。土師器の供膳具のうち、5点は内黒土器片で、両黒土器は出土しなかった。また、底部調整が判明したものは6点あったが、いずれも回転ヘラ切りであった。以下では図化した遺物5点について述べる。

1 (201012-000006) は、SP 37から出土した土師器の坏である。1/3強が残存している。法量は口径12.6cm、底径7.2cm、器高4.0cmである。色調は内外面ともに橙色で、胎土は精良だが赤色粒子を含む。外底面は回転ヘラ切りである。口縁部に煤状の付着物が薄く残り、灯明皿として使用された可能性もある。2 (201012-000004) は、SP 41から出土した土師器の皿である。法量は口径14.0cm、底径8.4cm、器高2.0cmである。色調は内外面ともに橙色で、胎土には細砂粒と赤色粒子を含む。外底面は回転ヘラ切りである。3 (201012-000002) はSP 21から出土した内黒土器の碗である。1/2弱が残る資料である。内部には荒い横方向のミガキを施し、外面にはニードル状の工具で書かれた文字が見られる。欠損しており判読が難しいが記号であろうか。色調は、内面は褐灰色で外面はにぶい灰色を呈し、胎土には赤色粒子を含む。4 (201012-000003) は、SP 26から出土した土師器の甕である。体部外面は荒いタテハケ、内面はケズリ後ナデる。色調は内外共ににぶい黄橙色を呈し、胎土には2mm大以下の礫と角閃石若干を含む。5 (200912-000005) はSP 32から出土した須恵器碗の高台部1/4片である。高台部径は、7.4cmである。内底部と高台接合部は回転ナデで仕上げる。色調は内外共に灰色を呈し、胎土には1mm大の礫、黒色粒子若干を含む。



第29図 出土遺物実測図 (1/4)

4. 小結

今回の調査地は、筑後国府Ⅲ期政庁（10世紀中頃～11世紀後半）の北西側に位置する。その区画の北辺中央には、掘立柱の八脚門が確認されており、そこから90m程北上すると、筑後国府域を東西に貫く幹線道路に接続する。調査地は、北門から幹線道路へ延びると推定される進入路の西側にあたる。同政庁は南北長141m、東西長137mの方形の範囲を土塁と大溝で区画し、敷地面積は19,000㎡を超える大規模な施設である。しかしその周囲（東側を除く）では、数十mの幅で遺構がまばらな空閑地となっている。今回の調査でも同様に遺構が少ない状況であった。遺物の出土も少ないが、主体となるのは9世紀代である。このように遺構の時期特定は難しい状況であるが、計画方位を考慮すれば、次のようになる。まず、調査区東側のピット群は西に53～57°くらいの傾きで帯状に集中している。これはⅢ期政庁に先行するSD 4203の走行方位が57°とほぼ同じことから、近い時期が想定される。次にSB 10は6°東に傾く小形の建物である。これは周辺で検出されるⅢ期政庁廃絶後の建物群と類似する状況であり、同様の時期の建物と想定されよう。（小澤）



第30図 調査区全景写真（西上空から）



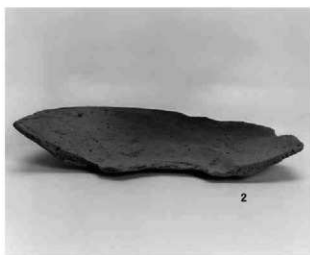
第31図 調査区全景写真(東から)



第34図 出土遺物写真①



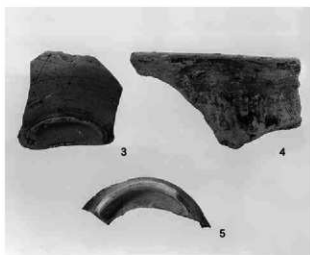
第32図 調査区北壁面土層写真(南から)



第35図 出土遺物写真②



第33図 調査区東側のビット群写真(南東から)



第36図 出土遺物写真③

報告書抄録(1)

ふりがな	ちくごくふあと
書名	筑後国府跡 ー平成22年度発掘調査報告ー
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第304集
編著者名	神保公久(編) 小澤太郎 江頭俊介
編集機関	久留米市役所 文化観光部 文化財保護課
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 TEL 0942-30-9225 FAX 0942-30-9718 Email : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	2011(平成23)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ちくごくふあと 筑後国府跡 第238次調査	く め し あきづままち 久留米市朝妻町 1442番地12外	40203	30112	33° 18' 48"	130° 32' 46"	20100120	13㎡	確認調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項	
筑後国府跡 第238次調査	官衙	平安	土坑1基、ピット		土師器		筑後国府Ⅲ期政庁の北西約100m付近での確認調査。時期不明の土坑を検出した。	
要 約								
第238次調査は、専用住宅建設に先立つ確認調査である。本調査区の北側約20m付近には、筑後国府城を東西方向に直進する官道が検出されている。今回は官道と筑後国府Ⅲ期政庁の間の遺構状況を確認することに主眼を置いた調査を行ったが、主要遺構は検出することができなかった。								
土木工事の届出日			平成21年12月15日			遺物の発見通知日		平成22年1月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ちくごくふあと 筑後国府跡 第240次調査	く め し わがしあいのわまち 久留米市東合川町 129-5番地	40203	30112	33° 18' 50"	130° 32' 46"	20100413 ～ 20100430	105㎡	確認調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
筑後国府跡 第240次調査	官衙	奈良 平安	堅穴建物1棟、溝1条 土壇墓1基		土師器・須恵器・鉄鎌 土師器・須恵器		筑後国府Ⅲ期政庁から 官道をはさんだ北側に 位置する上地区の官衙 群を調査。	
要 約								
第240次調査は、共同住宅建設に先立つ確認調査である。筑後国府Ⅲ期政庁から官道をはさんだ北側に位置する。調査地は、過去の調査において確認されている11世紀前半～中頃の官衙群の前面にあたり、広場としての空間であると想定されていた。今回の調査では、11世紀前半～中頃の官衙群よりも前代の堅穴建物、溝、土壇墓が検出され、それ以降の遺構は検出されなかった。このことから広場である可能性が高まった。								
土木工事の届出日			平成22年4月1日			遺物の発見通知日		平成22年5月6日

報告書抄録(2)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ちくごこくふあと 筑後国府跡 だい じゅうき 第242次調査	くろめしあさづままち 久留米市朝妻町 ばんち 1438-1番地	40203	30112	33° 18′ 47″	130° 32′ 48″	20101015 ～ 20101028	137㎡	確認調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項	
筑後国府跡 第242次調査	官衙	平安	掘立柱建物1棟、 ビット		土師器・黒色土器		筑後国府Ⅲ期政庁北西 隣接地の調査。同政庁 期前後のビットや掘立 柱建物を検出。	
要 約								
調査地は筑後国府Ⅲ期政庁（10世紀中頃～11世紀後半）の北西に隣接する。同政庁期の遺構と遺物は確認できず、政庁周囲が空閑地であったことがわかる。調査東端部に帯状に集中するビットは方向性から政庁前段階に、小形掘立柱建物は計画方位から政庁廃絶後の時期が想定できよう。								
土木工事の届出日		平成22年9月6日			遺物の発見通知日		平成22年11月1日	

筑後国府跡

—平成22年度発掘調査報告—

久留米市文化財調査報告書 第304集

平成23年3月31日

発行 久留米市教育委員会

編集 文化観光部 文化財保護課

印刷 株式会社 東広

